The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	記憶と自我の同一性 : ライプニッツにおける記憶について
Author(s)	松田, 孝之
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2001, 35, p. 15-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5654
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

記憶と自我の同一性

――ライプニッツにおける記憶について――

松田孝之

はじめに

ライプニッツにおける記憶がどのような内実をもつものであるかを明らかにするという作業は、どのような意義をもち、さらには何ゆえ為されねばならないのだろうか。ライプニッツは、『形而上学叙説』において、「実体的形相や魂は自らについての反省を欠いているがゆえ、それらは道徳的性質をもってはいない。（中略）しかし、知的魂は、自らが何ものか認識しており、（中略）単にあり続け、他のものよりも遥かに長く形而上学的に存続するだけでなく、道徳的にも同じままであり、同じ人格を形成する。というのは、記憶（souvenir、以下souvenirの訳は《記憶》と記す）あるいはこの自我の認識によってこそ、知的魂に賞罰を与えうるのである。（中略）かつて何であったかという《記憶》なしには不死性は何ら望むべきものでもない。」(G IV 459-460, DM 34)[1] と述べている。ここで、倫理的要請として、自我あるいは人格の同一性を保証する《記憶》の必要性が述べられているのである。

ここに二つの問題がある。一つは、かように要請される《記憶》はそもそもどのようにして成立し、またその《記憶》によっていかように自我の人格的同一性が保証されるのかという議論が為されていない点である。二つは、先の記述では《記憶》を知的魂を有する人間に固有のものと明らかに見なしているが、そのことは、ライプニッツが後に『モナドロジー』で次のように述べていることと矛盾しないだろうか。すなわち「記憶（mémoire、以下mémoireの訳は単に記憶と記す）は、魂における一種の連鎖（*consecution*）を生み出す。それは理性を模倣するが、理性からは区別されねばならない。それは、動物が、強い印象を与え、以前に似た表象（perception）をもつ何らかの表象をもつと、それらの記憶の表現（representation）によって、先行した表象において、その記憶に結びつけられたことを予期し、そのときそれらの動物がもった感覚（sentiment）と似た感覚へと向けられるのを、我々が見るのだから。」（G VI 611, Mon. 26）[2] と。なぜなら、理性より劣ったものとしてではあるが、明らかに記憶が動物にも備わっていることが述べられているのだから。

このような問題を解決せずに済ませれば、ライプニッツの記憶論は単なる常識論に堕すだけでなく、論理的矛盾あるいは困難を抱えた不完全な議論ということになる。したがって、我々はライプニッツの理論体系の内部において、主要なテクストを幅広く参照することによって、以上の問題を解決せねばなるまい。そのような作業を通して、ライプニッツにおける記憶の内実もまた明らかになることだろう。

第一節　二つの記憶　――mémoireとsouvenir――

記憶一般について　「ひとは、彼らの表象の連鎖が記憶の原理のみによって為される限り、獣のごとく活動して

いる。」(G VI 611, Mon. 28) とライプニッツが述べるとき、記憶は表象の連鎖を生み出す何らかの能力であるかのような印象を受ける。その一方で「動物の表象のうちには、理性といくらか類似性をもつ、連結 (liaison) がある。しかしその連結は諸事実 (*faits*) あるいは結果 (effect) の記憶にのみ基づき、いかなる意味でも諸原因 (*causes*) の認識に基づくものではない。そんなわけで、犬はそれによって叩かれたことのある棒から逃げるが、それは記憶が彼にこの棒が彼に対して引き起こした苦痛を表現するからである。」(G VI 600, PNG 5) とライプニッツが述べるとき、記憶は、単に能力というよりは、むしろ何らかの内容を伴う、過去の表象の一種であるかのように思われる。結果としてともに諸表象を相互につなげるのではあるが、それでは、記憶は純粋な能力なのか、それとも過去の表象の謂いなのか。記憶に内在する、このような両義性はどこに由来するのであろうか。記憶のうちに観念が保存されるということは、魂がすでにもっていた表象を呼び覚ます力能 (*puissance*) をもつということに過ぎない (cf. G V 127, NE II 10)、という考えに対して、ライプニッツは「このような能力が何に存しているか、そしてどのように働くかをもう少し判明に説明せねばならない。そうすれば、魂のうちならびに身体のうちにも過去の印象の名残 (reste) である態勢があると認識でき、記憶が何らかの機会を見いだすときのみそれらの態勢に気付くのである。」(G V 128, NE II 10) と述べている。また「偶然の、だが強烈な印象が、我々のうちの想像力や記憶のうちで、そのときともにそれらのうちにあった二つの観念を (中略) 結びつける。そして、それが我々に両者をつなげ、他方に続いて一方を期待する同じ傾向を与える。」(G V 252, NE II 33) とも述べている。このように、記憶は常に我々のうちにあるが、常に働いているわけではない。機会が与えられれば、我々はその権能を行使するのである。

ここで、そもそも観念とはいかなるものであったかを確認したい。ライプニッツは、観念は「(思惟の) 内的直接的対象であり、この対象は事物の本性あるいは性質の表出である。」(G V 99, NE II 1) と述べている。これは何を意味しているのか。「我々の魂は、どんな本性や形相であろうと、それらを考える機会が来ると、自らのうちに、それらを表現する性質を有する。そして、何らかの本性、形相や本質を表出する限り、我々の魂の性質が、文字通り事物の観念であり、それは、我々のうちにあり、我々がそれについて考えていようとなかろうと、我々のうちに常にある。」(G IV 451, DM 26) と述べられることから分かるように、観念とは何らかの事物の本性などを表出するような我々の魂の性質であり、それが現実に働くことにより、直接的な思惟の対象となるのである。それを裏付けるように「観念や真理は活動としてではなく、傾向、態勢、習慣あるいは自然的潜勢力 (virtualité naturelle) として我々に生得的である。けれども、これらの潜勢力はそれに対応するしばしば感覚できない何らかの活動を常に伴っているのである。」(G V 45, NE préface) とも述べられている。[3] このような観念についての定義を参照すれば、先に述べた記憶の働き方との類似性に否応でも気付かされる。

ところで、ライプニッツは「あらゆる注意は記憶を必要とし、しばしば我々が我々自身の現前する表象のいくつかに注意を払うように訓戒されない、いわば警告されないときには我々はそれらを反省なしに、気付くことさえなしに消え去るがままにするのである。しかし、もし誰かがそのすぐ後にそれらの表象に注意するように促し、我々が、例えば聞いたばかりの音に、気付かされるならば、我々はそれを思い出し (se souvenir)、それについての何らかの感覚をもっていたことに気付くことだろう。このように我々がすぐには意識しない表象があり、意識的表象 (apperception) はこの場合どんなに小さくとも少しの間をおいて知らされることによってのみ生じるのである。」

(G V 47, NE préface) と述べ、また「モナドが非常に整えられた諸器官をもっていて、それによってそれらの諸器官が受け取った印象のうちに、したがってそれらの印象を表現する表象のうちに、起伏に富み、際だつところがあるとき（中略）、それは感覚、言い換えれば記憶を伴った表象、すなわちそのある反響が長い間残り、機会があれば聞こえてくるような表象にまで達する。」(G VI 599, PNG 4) とも述べている。これらの記述を参照する限りでは、記憶は意識的表象の形成に必要なもののようである。

以上をまとめれば、記憶とは、表象や観念を連鎖・連結し、意識的表象を形成する能力をもつものであり、それ自身が思惟の対象ともなりうる観念の一種である、と考えることができよう。

自我の同一性と《記憶》について　これまで、我々は記憶一般について考察してきたわけだが、自我の同一性と並んで語られる《記憶》とはそもそもいかなるものなのか。観念としての記憶と同義なのか、それとも全く異なるものなのか。ライプニッツが「外的対象を意識する (s'appercevoir) とき、それは感覚 (*sensation*) と言い、想起 (*réminiscence*) とは、対象が戻ることなく、それが反復することであるが、その対象を以前にもっていたことを知っている場合にはそれは《記憶》である。」(G V 147, NE II 19)[4] と述べているところを見ると、《記憶》は単なる思い出された具体的な記憶内容であるように思われる。ところが、ライプニッツは、人格の同一性について論じた『人間知性新論』第二部、第二十七章において「ある期間をおいた《記憶》は欺きうる。このことを我々はしばしば経験し、このあやまりの自然的根拠について考える手段がある。しかし、現在のもしくは直接的《記憶》すなわち直前に過ぎ去っていったものについての《記憶》、すなわち内的作用を伴う意識あるいは反省は本来欺きえない。」(G V 220-221, NE II 27) とも述べている。ここで注目すべきは、直接的《記憶》が内的作用を伴う意

識や反省に言い換えられている点である。

以上の点を鑑みれば、二つの記憶、すなわち記憶と《記憶》とは相容れない概念であるかのように思われる。だが、それでは、論理的矛盾あるいは困難を認めたことになる。我々はこの二つの概念を包括するような標準理論とでも言うべきものを求めねばなるまい。

第二節　記憶の標準理論

標準理論の構築　ライプニッツは「これらの感じ取ることのできない表象（微小表象）はさらに、この個体が感じることがなくとも、つまり明白な《記憶》がもはやないときでも、卓越した精神には知ることができるような、これらの表象がこの個体の現在の状態とつなげて保存するこの個体の以前の状態の痕跡ないし表出によって特徴づけられた同一の個体を示し、構成している。しかし、それら（私が言うところのこれらの表象）はいつか起こりうる周期的展開によって必要ならばこの《記憶》を再発見する手段を与えさえする。」(G V 48, NE préface) と述べている。このような記述から分かることは、明確に意識されていなくとも、個体の同一性は微小表象のつながりによって保証され、さらには、これらの微小表象から、《記憶》を再現することが可能であるということである。つまり、微小表象のつながりが意識的に知覚されれば、それが《記憶》を形成することが示唆されている。このような表象がないということはありえない。なぜなら「単純実体は消滅しえず、その表象以外のいかなるものでもない、何らかの変容（affection）なしには、それは存続しえない。」(G VI 610, Mon. 21) のだから。したがって、「非物質的存在つまり精神からその過去の実在のあらゆる表象が奪われることはありえない。それにかつて起こっ

たことのすべての印象がそれには残っており、それにいつか起こるであろうことのすべての予感さえそれはもつのである。しかしこれらの感覚はほとんどの場合あまりにも微小なため、判別することも、意識することもできない。しかしながら、それらはいつか恐らく展開するはずだろうけれども。諸表象のこの持続（continuation）と連結（liaison）こそ実際に同一の個体を形成し、意識的表象は（すなわち過去の表象を意識するときには）、道徳的同一性さえ証拠立て、実在的同一性を現れさせるのである。」（G V 222, NE II 27）と述べられるように、諸表象の持続と連結が自我の同一性を形成し、意識的表象こそ自我の同一性の根拠となるのである。ならば、《記憶》といえども、その本体は微小表象に求めざるをえないことになる。さて、「意識性（conscienciosité）ないし自我の感覚が道徳的つまり人格的同一性を証明」（G V 218, NE II 27）し、「自ら同一であると感じる人格自身にとって明らかな同一性は、反省あるいは自我の感覚を伴う各々の近接的な移行において実在的な同一性を前提とする。というのも、内的かつ直接的表象は本来欺くはずがないからである。」（G V 218, NE II 27）[5] のだから、まさに内的で直接的な表象こそ、我々に直接的に与えられているものである。そして、それを意識的にすることこそが、自我の感覚であり、反省であるのである。また、それは先にも述べたとおり、直接的《記憶》と換言可能であるのだから、《記憶》と同一視されるような自我の認識は人格の近接的移行を前提とすることによりその同一性が認められ、そのような近接的移行は、表象の持続と連結、ひいては意識的表象によって知られ、自我の同一性を保証するに至るということが分かる。

さて、意識的表象はどのようにして得られるものだったか。先に述べたとおり、意識的表象は注意によって喚起された表象であり、注意とは記憶を必要とするものであった。そして、このような記憶の働きによってさらに、表

象は「外的事物を表現するモナドの内的状態」であり、意識的表象は「意識つまりこの内的状態の反省的認識」(G VI 600, PNG 4) であると述べられることからも分かるように、内的状態の反省的認識と言われる限り、それは直接的《記憶》と言い換えることさえできる。

このようにして考えてみれば、表象の持続と連結を伴うような自我の認識、すなわち《記憶》もまた記憶の働きのうちに収まるものであると言える。まさにライプニッツにおける記憶の標準理論とは、様々な観念として保持される記憶によって、微小表象を連鎖・連結し、意識的表象へと織り上げるというものだと言えるだろう。

術語の問題　記憶の標準理論を構築した今、今度は術語に関して次のような疑問が生じる。記憶が意識的表象を形成し、その意識的表象が直接的《記憶》と言い換え可能であるとするならば、なにゆえ記憶と《記憶》との術語の区別が必要となるのか。さらに記憶の働きが必然的に《記憶》を生ぜしめるのであれば、《記憶》は人間に固有のものであるという、最初に見た議論に矛盾するのではないか。

実は、ここにライプニッツの記憶理論における揺れが、迷いが窺える。その揺れは意識的表象と言い換えうる反省的認識の内実に認められる。そもそも人間と動物の違いがどこに存するものなのか。「実体的形相や魂は、精神よりも不完全ではあるが、同様に全宇宙を表出している。しかし、主要な違いは、それらが自らが何ものか、何を為すのか認識せず、したがって反省することができないので、必然的かつ普遍的真理を発見しえないという点である。実体的形相や魂は自らについての反省を欠いているがゆえ、それらは道徳的性質をもってはいない。」(G IV 436, DM 12) と述べられるように、それは反省能力の有無であり、普遍的かつ必然的な真理の認識が可能か否かに求められる。しかし、事態はそう単純ではない。実際先に引用したように、記憶による表象の連鎖は理性を模倣

するものだからである。それでは、どのように区別するのがよいのか。「獣の連鎖は推論の影でしかなく、すなわち形象的想像（imagination）の結合でしかなく、ある形像（image）から他の形像への移行に過ぎない。なぜなら、以前に似た新しい事態において、事物の形像が記憶においてつながっているので、まるで事物が実際のつながっているかのように、かつてそれにつながっていたことを期待するのだから。」（G V 44, NE préface）と見なされる動物に対して、「理性のみが（中略）必然的な推論の一貫性の力のうちで確実なつながりを見いだすことができ、それによって、獣が従うような形像の可感的つながりを経験する必要なく、出来事を予見する手段がしばしば与えられる」（G V 44, NE préface）のである。さらに、「真の推理は、（中略）諸観念の不可擬のつながりと誤ることない帰結を成す、必然的ないし永遠の真理に依存している。（中略）これらの必然的真理を認識するものは文字通りの意味で理性的動物と呼ばれるところのものであり、それらの魂は精神と呼ばれる。これらの魂は反省的行為をすることができ、我々が自我、実体、魂、精神と呼ぶところのもの、一言で言えば非物質的な事物や真理を考察できるのである。」（G VI 600-601, PNG 5）と述べられるように、理性の働きによって反省的行為が為されるのである。ここにおいて、記憶によって形成される意識的表象を反省的認識と呼びうるのがなぜかが解る。すなわち、記憶による表象の連鎖が理性を模倣するということは、それが反省的行為をも模倣することを意味しないだろうか。まさに、反省的認識には、このような低次のものと、理性による「必然的真理の認識と真理の抽象」によって高められる「反省的行為」（G VI 612, Mon. 30）のような高次のものとがあり、「この反省的行為によって、我々は自我と呼ぶところのものについて考え、（中略）そして、反省的行為が我々の推論の主要な対象を与えているのである。」（G VI 612, Mon. 30）と考えられる。

以上の議論をまとめれば、記憶の働きそのものは微小表象を連鎖・連結し、意識的表象または感覚にすることであった。したがって、それ自身は一種の再認のようなものであり、動物もまたある種の再認を行っている限り、人間にだけ特有のものではない。そのような再認はあくまで擬似理性であり、擬似的な反省的認識に留まるものである。しかし、同じ記憶の働きによって形成された意識的表象がさらに、真理の抽象、反省、原因の認識といったものを通して、高次の反省的行為をも可能にし、自我の認識つまり《記憶》にまで深まることを動物に認めることはできないのである。まさに、記憶と《記憶》との術語の区別は、先に述べたように、前者が表象を連鎖・連結するという働きに重点を置き、後者が自我の同一性を保証するような記憶内容という点に重点を置く、というだけではなく、理性の働きが介在しているか否かを明確にするための区別であると考えられるのである。

結びにかえて

我々は、以上のように、ライプニッツにおける記憶がいかなるものか、つまり一方で、観念としての記憶一般について、思惟の直接的対象であると同時に、表象を連鎖・連結する我々の魂に内在する性質という両義的な性格を有するものである点を見、他方で、観念としての記憶の働きによって形成された意識的表象から理性の反省的行為によって、自我の同一性を保証するような《記憶》が成立することを確認し、さらにそのような議論を通して見いだされた記憶の標準理論とも言うべきものによって、一見矛盾するかに見える記憶と《記憶》をめぐる言説が一つに包括されるのを見た。

最後にそのような記憶がライプニッツの思想全体において果たす役割について、及び今後の課題について、少し

考えておきたい。先にも述べたとおり、ライプニッツにおける記憶が意識的表象あるいは感覚の形成に関わりがあるということは、まさに記憶の働きなしに、認識の問題を考えることができないということにもなる。したがって、ライプニッツの認識論を考える上で、記憶なしに論じることはまさに本末転倒であるといっても過言ではなかろう。さらに、我々の認識のもととなる意識的表象や感覚が記憶の働きを介しているということは、「このように我々がすぐには意識しない表象があり、意識的表象（apperception）はこの場合どんなに小さくとも少しの間をおいて知らされることによってのみ生じるのである。」（G V 47, NE préface）と述べられていたように、我々がその認識のあり方からしてすでに時間的な存在であるということをも暗示しており、この点について、クラーク宛の書簡で「諸物体の継起的な位置に関する秩序」（G VII 376）と述べられるようなライプニッツの時間概念との関わりを通して論じる必要のあるものであろう。さらに、《記憶》が自我の道徳的同一性を保証すると言われるように、それが倫理的な諸問題を論じる上での基礎となっていることも決して軽視してはならないだろう。事実、『形而上学叙説』では「神が我々の実体だけでなく、記憶や我々の人格すなわち我々が何ものかという認識を常に保存するであろう。」（G IV 460, DM 35）とも述べられており、さらには『モナドロジー』において「必然的真理の認識と真理の抽象によってこそ、我々は反省的行為へと高められるのである。この反省的行為によって、我々は自我と呼ぶところのものについて（中略）考えるようになるのである。そういうわけで、我々について考えることによって、我々は存在、実体、単純なものや複雑なもの、非物質的なものそして神さえも考えるのである。というのも、我々においては限られているものが、神においては限りがないと考えるからである。」（G VI 612, Mon. 30）と述べられていることからも、《記憶》及び自我の認識、さらにはそれらを可能にする反省、それらと神の認識の問題との

関わりについても、より深く考察する余地が残されているだろう。

註

ゲルハルト版ライプニッツ哲学著作集（*Die philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz*, éd. C. I. Gerhardt, Olms, 1996）からの引用には、略記（G）、巻数（ローマ数字）、頁数（アラビア数字）を併記して、文中にて引用箇所を示す。なお、文中のフランス語、ラテン語は上記の著作集に依拠し、隔字体は訳語に傍点を付し、原語はイタリックで示した。

さらに、次の著作からの引用には、それぞれゲルハルト版からの引用箇所の略号の後に、以下のような略号を付記する。

『形而上学叙説 *Discours de métaphysique*』（DM）、節（アラビア数字）を後記。

『人間知性新論 *Nouveaux essais sur l'entendement humain*』（NE）、序文（préface）あるいは部（ローマ数字）と章（アラビア数字）を後記。

『モナドロジー *Monadologie*』（Mon.）、節（アラビア数字）を後記。

『理性に基づく自然と恩寵の原理 *Principes de la Nature et de la Grace, fondés en raison*』（PNG）、節（アラビア数字）を後記。

（1）　同様の記述はアルノー宛書簡にも見られる。すなわち、「それゆえ、自らの仕方で、ある関係のもと、つまり実体が宇宙を見る観点にしたがって、個体的実体はすべて全宇宙を表出するのである。そしてまるで世界には神とその実体しかないように、実体の次の状態は（自由で、つまり偶然的であるけれども）実体の以前の状態の結果なのである。そのようにして、個体的実体つまり完全な存在はそれぞれが一つの世界のようなものであり、神以外の他のあらゆるものから独立しているのである。我々の魂の不可滅性のみならず、我々の魂がその本性のうちに常に以前の状態のすべての痕跡をいつでも呼び起こすことのできる潜在的《記憶》によって保持していることを証明する

にこれほど有力なものはない、というのも、我々の魂は意識をもち、それ自身のうちに各々が私と呼ぶものを知っているのだから。このことによって、我々の魂は道徳的性質をもちうるのであり、今生の後でさえも賞罰を可能にしうるのである。というのも、《記憶》なしには不死性は何の役にも立たないのだから。」(G II 57)。このような記述が孕む問題については、次の註を参照。

(2)　このような問題は『形而上学叙説』においてすでに内在している。なぜなら、個体的実体には過去に起こったことの名残などが内在しているのだから (G 433, DM 8)、すべての個体的実体が有するそのような過去の名残と知的魂あるいは精神のみが有する《記憶》との関係がどのようなものなのか、という問いである。(cf. R. C. Sleigh, Jr., *Leibniz & Arnauld*, Yale University, 1990, p. 133.)

(3)　「観念は事物について思惟するある近接的な能力あるいは態勢 (propinqua quaedam cogitandi de re facultas sive facilitas) を要請する。」(G VII 263) などという記述も見られる。

(4)　Sleigh, Jr.は、この引用における想起と《記憶》の区別によって、註(2)の問題を解決できると考えている。すなわち、想起は過去の表象の意識を伴わない限りにおいて、あらゆる個体的実体が有するものであり、《記憶》は過去の表象の意識を伴った想起である限りにおいて、精神のみが有する (cf. R. C. Sleigh, Jr., *op. cit.*, pp. 133-134.) と。確かに想起は過去の表象を意識しないという意味で動物の記憶に対応するものであるかに見える。しかし、ことはそれほど単純ではない。というのは、ライプニッツにおいて想起 (réminiscence) という語がはっきりと《記憶》と区別されていないことが見て取れるからだ。ライプニッツは『人間知性新論』において「自ら道徳的同一性を見いだすためにはある状態と、それに近接したあるいは少し隔たった状態の間に意識性の媒介的な連結 (moyenne liaison de consciencisité) がありさえすれば十分である。(中略) だから、もし病気で意識性の連結の連続性が中断し、どのようにして現在の状態になったか分からなくても、より隔たった出来事を覚えていれば、他の人々の証言が私の記憶 (réminiscence) の空白を満たしてくれるだろう。」(G V 218-219, NE II 27) と述べている。ここにおける réminiscence はあくまで人間における意識的な記憶内容を指しており、想起というよりむしろ記憶と訳すべきところであろう。このように考えれば、表面的な術語の違いによって、問題を解決しようとするのは安易ではないだろうか。事実、Sleigh, Jr.は先の著作において、souvenir の訳語として memory を用いて

いる。mémoire と souvenir が明確に区別されているところを見る限り、その訳はライプニッツの記憶の理論の重要な点を見逃す危険性を孕んだものではないか。

(5) この近接的移行がどのような事態を意味しているかは、引用箇所の以下で「自ら道徳的同一性を見いだすには、何らかの飛躍や忘れられた期間が混ざっているとしても、ある状態からそれに近接したあるいはそれから隔たった他の状態への意識性の間接的連結があれば十分である。」(G V 219, NE II 27) と述べられていることからも窺えるように、魂の内部の状態の継起的な変化であり、それは意識されなければあたかも断絶しているように思われるものである。例えば、病気で意識を失っていたときのように。しかし、外的事物を表現するモナドの内的状態こそ表象 (cf. G VI 600, PNG 4) であり、『モナドロジー』における「単純実体は消滅しえず、その表象以外のいかなるものでもない、何らかの変容 (affection) なしには、それは存続しえない。」(G VI 610, Mon. 21) という記述からも分かるとおり、人格、言い換えれば人格を形成する魂の、つまりモナドの内部の表象の変化そのものであると考えられる。

(大学院後期課程学生)

La mémoire et l'identité du moi chez Leibniz

Takayuki MATSUDA

La mémoire forme une espèce de consecution des perceptions, qui imite la raison. Elle est une sorte d'idée qui est puissance de lier les perceptions, et qui est un objet immédiat interne de la pensée tant qu'elle est en acte. Les bêtes en sont douées. Or le souvenir assure l' identité du moi. D'où on voit qu'il n'est propre qu'à l'âme intelligente ou raisonnable. De telles affirmations leibniziennes sont, ce semble, en contradiction l'une avec l'autre.

D'après Leibniz, la liaison des petites perceptions, qui donnent le moyen de retrouver un souvenir, forme l'identité d'individu. C'est pourquoi le souvenir doit être cherché dans de telles perceptions. Or la mémoire lie les perceptions comme plus haut. Il s'ensuit que le souvenir, qui est l'aperception de la liaison des perceptions, dérive de la mémoire.

Alors, pourquoi les bêtes n'ont-elles pas de souvenirs? Elles ont la mémoire, mais ne connaîssent pas de vérités necessaires et éternelles qui font la connexion indubitable des idées. Cette connaissance nous élève aux actes réflexifs qui nous font penser au moi. De là, les bêtes n'ont jamais de souvenirs, c'est à dire la connaissance du moi où l'aperception formée par la mémoire est approfondie.

キーワード：記憶(mémoire, souvenir)　自我(moi)　同一性(identité)
微小表象 (petite perception)　観念(idée)